
善悪ヒーロー

クレーヴ ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

善悪ヒーロー

【Nコード】

N5647W

【作者名】

クレージュ

【あらすじ】

幼い頃、自分を助けてくれた人物に憧れを抱いていた真央^{マオ}。

真央にとってその人物は何年経っても変わることのない英雄^{ヒーロー}だった。

そんな英雄^{ヒーロー}に自分もなりたいと心に秘めてはいるが変わることのない日常。

しかしある日見た夢の中で骸骨から告げられた質問が彼の運命を変えることとなる。

「お前がなりてえのは正義のヒーローか？ それとも悪魔のヒーローか？」

今、ヒーローが誕生する？

英雄1「ヒーロー」(前書き)

目にとめていただきありがとうございます。

そして読んで下さるのであれば、さらにありがとうございます。

「善悪ヒーロー」

ヒーローというものはどういうものなのか？

邪道な展開になるかもしれませんが、その邪道を楽しんでいただけたらと思います。

では前置きは簡単に…本編をどうぞ。

英雄1「ヒーロー」

例えばの話。

車道の真ん中に子猫がいる。

自分はそれを助けようと車が行きかう道路に飛び出した。

しかし自分がしようとしたことなんて意味がなかったとしたら？

次の瞬間、目の前には車。

「ああ、死んだ」：そう思ったときパツと助けてくれた人物がいる
としよう。

それは自分にとってどういう風に写るだろう？

子猫を助けようとした自分を助けてくれた”英雄”。

その”像”はきつと小さい時ほど根強く残るであろう。

そう：だって子猫を助けようとした”僕”はまだ子供だったのだから…。

英雄：つまりヒーロー。

そんな人物像は子供なら誰しもが持っているものだ。

何とかレンジャーとか何とかマン。

見渡せば架空のヒーローなんて沢山居るのだから。

しかしそれが架空ではなく実在だったらどうだろう？

簡単な例えでいいなら”父親”。

それが一番身近なヒーローに見える人もいれば、好きなスポーツ選手、芸能人だったりなんか見る人から見れば立派なヒーロー像になりえる。

しかしこれはカッコいいとか凄いやとか簡単な理由で思っているだけだ。

何でかって？

そんなの答えは簡単だ。

じゃあその人物を一生ヒーローとと思っているのかって話になってくるからだ。

父親なんて自分が中学に入る頃にはただのウザイ親。

スポーツ選手だって小学校で違うスポーツが好きになったら、今度はそのスポーツ選手が好きになった。

芸能人だって好きな人は年に1回は変わったり増えていったりする。

”カッコいい” Ⅱ ”英雄” ではなく”カッコいい” Ⅱ ”好き”。

年を重ね、そんな単純な理由が分かったからだ。

だからカッコよくない父親なんて好きですらなくなった。

年を取り引退したスポーツ選手もカッコよかった時の面影すらなくなり冷めた。

同じ理由で老けてしまった芸能人もだ。

しかし年を重ね分かったことは他にもある。

それはどんな些細なことでもいいし、人生を変えるほどの大きなことでも同じだと思う。

自分に直接的に影響を与えた人物はいつまでたっても英雄なんだって事が。

だって変わらないヒーロー像が変わらず脳裏に焼きついているのだから。

そう…自分の中でヒーローに見えたその瞬間に自分の中での憧れのヒーローが誕生しているのだ。

僕の中でもずっと変わらないヒーローがただ1人だけいる。

名前も知らないし今の顔だって知らない。

ただ覚えているのは助けてもらったその時の顔と…その時の”カッコいい” 姿だけだ。

ここで誤解してもらっては困る。

決してその人物に会いたいと思っているわけではないって事を。思っていることは別。

そんなヒーローに僕も…。

僕もずっとなりたいたいと思っていた。

...

春。

桜の葉が揺れ、心も躍る…わけなんてない。

桜並木を歩こうが何も思わない。

だってこの景色はもう何回も見ているのだから。

綺麗だ綺麗だと騒いでいるその女子たち。

じゃあ君たちが靴の下で踏んでいる桜の葉は一体何なんだ？

枝についていれば綺麗なのか？

寄せ集まっていれば綺麗なのか？

手の平に葉が落ちてきて、また綺麗だ綺麗だと騒いでいる女子を横目に僕は眠い目をこすり歩いている。

僕の名前は”干芦^{ヒヨシ} 真央^{マオ}”。

真央…名前だけ聞けばどちらかといえば女らしい名前で好きじゃない。

親しい者からはマオウなんて呼ばれていて英雄に憧れを抱いているものとしては最悪だ。

中学3年で14歳で制服はブレザーで髪は黒髪で身長は160cmで体重52kgで…あとは何を言えればいいのだろう？

ちなみに髪にワックスはつけてないし服装は学校指定だしカバンも学校指定。

まあ至る所、真面目というやつだが…単純にグチグチ言われたりが面倒だから何もしていないだけだ。

そうそう…左目の上に縫い跡があるが、これは小さい頃の傷跡だ。

「真央！」

「何だ：紗絵か」

”白石^{シライシ} 紗絵^{サエ}”

僕と同じく黒髪で肩より少し長い。

身長は151cmだったか？

よく覚えていないし体重は太ってはいないが詳しくなんてのは勿論知らない。

目は二重でコンタクトらしい。

昔は今ほど明るくはなかったが、今では元気すぎるくらいに明るく前向きな人間だ。

「何だとは何よ：それが久しぶりに会った幼馴染に言う台詞？」
「久しぶりでもないだろ：春休みにもお互い何度か使いに出されてるんだし」

幼馴染は親同士も仲がいいわけで。

果物を買ったとくれば向こうの家に持ってけとなるわけで。

春休みだろうと否が応でも顔はあわせているわけで。

「でも制服姿は久しぶりでしょ？」

「：見たいとは1秒たりとも思わなかったけどな」
「殴るわよ？」

握り拳を払いのけ、3年4組。

自分の教室へと向かう僕を追いかけてくる紗絵もまた同じクラス。
中3になったとはいえクラス替えがあるわけでもない。

転校生がくるわけでもない。

担任も変わらない。

何も変わらない環境。

それが平和なのかそれとも退屈なのか。

人それぞれ感じ方は違うであろうが僕はどっちでもいい。

窓際の席、雲一つない青空を眺め、初日からいつの間にか眠っていた。

・・・

その夢は不思議だった。

幼い頃にヒーローだと思っていた人物達が次々と出てくる。

そして最後に今も変わらない、変わることもない只1人のヒーローが出てきたのだ。

忘れるはずもない顔だったから懐かしくはなかった。

だけど久しぶりにあの時の顔を実際に見れたような気がして嬉しかった。

しかしそれも束の間、光1つない暗闇へと場面は変わった。

次の瞬間、僕にスポットライトのように光が当たると目の前にも同じように光が3点。

2つは白い扉と黒い扉を射している。

そしてもう1つ：2つの扉の間。

最後の光が射す場所に、扉と同じく白色と黒色の2つの王冠を動物の耳のようにかぶった骸骨がイスに腰掛け足を組み、肘掛に両肘を置き下を向いていたのだ。

どれもこれもが不思議だった。

その中でも一番、異様な骸骨にビクリする僕の方をゆっくりと顔をあげ見る骸骨。

そして何処から声を出しているのか不思議な肉体で聞いてくるのだった。

「お前がなりてえのは正義のヒーローか？ それとも悪魔のヒーローか？」

理解するには到底乏しい質問だった。
「ただ」ヒーロー」という言葉だけで充分、興味はそそられた。

英雄1「ヒーロー」(後書き)

運命の扉が開く。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

どうでしたかね？

感想等や疑問等いただけると励みになるのでよかったらお寄せください。

誰しもがヒーローに憧れを抱いていた時期があると思います。
皆さんにとってのヒーローは誰でしたか？

英雄2「英雄の形」

「お前がなりてえのは正義か？　それとも悪か？」

突如として目前に現れた骸骨がそう聞いてくる。

話の前後もない突拍子の質問だ。

一体これは夢なのか現実なのか…。

意識はハッキリとあるから現実なのだろうか？

いやしかし僕は学校にいたわけだから、やっぱり夢なのだろうか？
考えても答えを教えてくれる先生など今はいないのである。

それじゃあ質問について考えてみるのはどうだろう。

僕がなりたいのは正義か悪かだって？

そんなの考える間もなく正義に決まっている。

僕が憧れていたヒーローは紛れもなく弱者を助ける正義のヒーロー
なのだから。

しかしそれを答えたからといって何なんだ？

「正解です」とでも言われるのか？

この骸骨から？

そんな馬鹿な話があるわけない。

「やっぱり夢か」

ボソッと呟いた。

「夢かどうかはお前が信じるか信じないかだ。俺はしまったこっち
やない」

独り言のように呟いただけなのに何やら骸骨と会話をしてしまった。

これは自慢できる：わけもないな。
それこそ馬鹿にされるだけだ。

「俺が聞きたいのは只一つ。 お前がなりてえのはどっちかつう
返答だけだ」

この骸骨もしつこい。

だからそれを聞いてお前は一体何になるというのだ。

僕は一体何になるというのだ。

僕がそう思っていると骸骨を足組をとき、立ち上がろうとする素振
りを見せる。

夢とはいえ、リアルな骸骨に近づかれては不気味なので慌てて答え
ようとする。

「僕がなりたいのは…」

「例えばの話だ」

何故、僕の返答を待ってたくせに話そうとしたら自分が話し出すん
だ。

この骨め。

「正義のヒーローっていうのは悪いものを倒すから正義のヒーロー
と言われる」

黙って聞いてればいいのだろうか？

まあこいつが言っているそれは間違っていないと思う。

「じゃあ例えばの話、悪いやつらは生きていく為にそれらの行いを
しているとしたらどうだ？」

「生きていく為？」

「ああそうだ。何も悪いことをしたくてしているわけじゃない：生きていくためにはそうするしかないとしたら？ 人間だってそうだろう？ 生きていく為に働き、物欲を満たし性欲を満たし睡眠欲を満たす。俗に言う三大欲求を満たすにはしたくもねえがしなきやならねえ事をしてるから出来るんだ」

骸骨のくせにやけに詳しく知っているじゃないか。

見た目は骸骨だが人にでも近いのだろうか？

「だがお前が言うそれらがちゃんと出来ていれば、やっぱり悪は道からそれた事をしている者たちだろう？ 働かないから金がなく犯罪を起こすのがいい例だ」

「立派な正論だ。じゃあお前はそういう者たちの根っこってもんを知ろうと思ったことはあるか？」

犯罪者たちの根っこ？

そんなものは確かに考えたことはない。

大体、ニュースなど見ていても強盗、窃盗etcするやつらは「金がなくてやった」、そればかりだ。

根っこなんて知る必要もなく自らで金がないと理由をあげている。それが根っこってやつじゃないのか？

「犯罪をする前、苦しみ、もがき、そんな葛藤を心の中でしているとしたら？ まだ悪になる前はお前と変わらない一人間だ。そういう弱者を救うのがヒーローじゃないのか？」

弱者を救うのがヒーロー。

自分もいつか困っているものの力になれるような人になりたいと。それが憧れた英雄の形だ。

「お前になりたいヒーローは悪を倒し正義を示す者なのか？ 本当になりたいのは全てを救う英雄じゃないのか？」

全てを救う英雄？

正義だろうと悪だろうとやることは同じ？

「お前自身、身をもって知ることになるだろう…選択は一度きり、どっちになりてえかよく考えるこった」

骸骨がそう喋り終わると同時にスポットライトのような光は消え、再び暗闇へと戻った。

次の瞬間、僕の目の前に映ったものはチョークを手に持ち僕の横に立っている先生だった。

夢か真か…眠っていたのか起きていたのか。

それは僕でさえ分からない事だった。

英雄2「英雄の形」(後書き)

脳裏に残る…。

ここまで読んでいただきありがとうございます。
この先どうなっていくのか作者自身も手探りですがお付き合いくださいませ。

ではまた次回も読んでいただけたら嬉しいです。

英雄3「Welcome」

夢の世界なのかどうかは僕自身、ハッキリとは分からない。
しかし眠っていたことは確かだろう。

何せ隣に立っている先生の顔は穏やかではないのだから。

「さて、干芦。お前は今、先生が何を言いたいか分かるか？」

そんな事は分かるはずもないし分かりたいとも思わない。
しかしどういう感情かだけはヒシヒシと伝わってくる。

「今年もよろしくお願いします？」

心にも思っていないことを言ってみた。

好きでも嫌いでもない担任。

僕たちが決められるわけもないから、生徒の立場から言わせてもらっても仕方なくまた1年間付き合うのだ。

「その挨拶はとくに済んでるよ。お前がこの時間ずっと死んだように眠ってる間になあ。さっさと顔を洗って来い！」

逃げるように教室を飛び出し水道へと走ってきた。

担任の名前は”木枯^{こがらし} 達也^{たつや}”

俗に言う熱血教師と言われればそうかもしれないが僕の中では生真面目男。

曲がったことが大嫌いなだけでそれを生徒にも強要するだけだ。
自分が通った大学が有名かは知らないが話の中でよく登場する。
眼鏡こそかけてはいないが髪は七三でスーツと何とも典型的な格好だ。

身長は僕より20cm近く差があるだろうな。

水道で寝ぼけてなどはないが顔を洗い、少しばかり水を飲む。
軽く息を吐くとゆっくりと来た道を歩き出した。

窓の外には朝、通ってきた桜並木が見える。

平和であり退屈でもある日常。

いっそ夢のように骸骨でも現れてくれれば刺激的なんだが…そんな事を考えながら廊下を歩く。

そんな時、ふと誰も居ない教室で動く影が見えたような気がした。
扉に近づき小窓から中を様子見る。

誰もいないかと思ったが再び奥の方で動く影が今度はハッキリと見えた。

僕はこういう時に迷いはない人間なので、それを確認すると教室の扉をあける。

ビックリして慌てふためき逃げようとする人物の行く手を塞ぎ顔を
確認する。

顔も名前も知らないが逃げようとしたところを見るとやましい事を
してたに違いない。

「何をしてたんだ？」

そう聞いても黙っている。

やましいことがあるならそれも当然だろう。

まあ馬鹿でも分かるであろう証拠があるから同じ質問はする必要が
なかった。

後ろには机からばら撒かれているお札。

この男子生徒の足元にまで転々と落ちている。

慌てて逃げようとしたからだろう。

そういえば今日は登校初日。

何やら色々を買うものもあるらしく親から渡されていたな。

当然、僕以外の生徒も同じだろう。
それを盗むために誰もいない隙を狙っての犯行か。

「金がないから、欲しいから？」

どうせニュースになる犯罪者たちと同じ。

「金がない」そんな理由で盗んだに決まっていると心で思っていた。

「仕方なかったんだ：うちは父さんはいないし母さんが頑張って働いてるけど貧乏で。 お金渡されたけど：ちゃんと持ってたけど落としちゃってなくなっちゃって」

「だからって仕方ないわけではないだろう？ ほら：立て替えてやるからお金戻しとくんだな」

僕が差し出したお金をビツクリして最初は受け取りはしなかったが無理やり手に押し込んだ。

「いつか返してくれればいいさ」

何度も頭をさげられ何度もお礼を言われた。

昔から正義のヒーローになりたかったから人の役に立つことは進んでやっていた。

だからお礼を言われるのも初めてではなかったけれど…。

僕が今、助けたのは一体誰なんだろう？

お金を盗まれそうになっていた生徒？

それとも盗もうとした困っていた悪？

それとも2人とも？

こんなこと初めて考える事だった。

それに僕が簡単にお金を貸すことが出来たのだって理由を聞いたからだ。

悩み、もがき、葛藤していた。

これが骸骨が言っていた根っこというやつなのだろうか？

正義に理由があるとするならば悪にもまた理由がある。

何となくそれが分かった気がした。

教室に戻ると「遅い」と再び怒られ、お金を忘れたというと三度怒られた。

・
・
・

その夜、眠りにつくと再びあの空間へと誘われた。

2つの白黒の扉。

白黒の王冠をかぶった骸骨。

今度は何も驚きはしなかった。

昼間と変わらない光景の中、変わらない質問を骸骨はしてくる。

「さあ改めて聞こう…。 お前がなりたいのは正義のヒーローか、それとも悪のヒーローか？」

改めてその質問を聞いたとき自分が少し笑ったことに自分で驚いた。きつと答えが分かったからだろう。

今度は自らが歩き出し骸骨の方へと向かって行っていた。

「ヒーローに正義も悪も関係ない。 僕がなりたいのは全てを救う英雄だ。 だったら…」

骸骨の目の前まで来ると足を止めた。そして眼球などない骸骨の目を睨む。きつと骸骨も今、自分を見ているのだろう。

「だったら僕は全てを救う。正義だの悪だの関係ない世界を作ればいいだけだ。その為になら悪魔のヒーローにでもなってやるさ
…お前の言う根っこ、そこで悪を正してくる」

「悪の頂点となり悪という世界を消してくるか…面白い」

”Welcome、Hero（英雄）へ”

英雄3「Welcome」(後書き)

芯は変わらず。

ここまで読んでいただきありがとうございます。
さて序章も終わり、やっと本編に入っていくといった感じですかね。
悪の道という邪道展開ですがお付き合いください。

ではまた次回も読んでいただけたら嬉しいです。

英雄4「始まり」

”Welcome, Hero（英雄）へ”

骸骨が低く不気味な声でそう言った。

本当に歓迎などされているのかは定かではない。

しかし一つだけ確信を持てるとするならば、撤回はきかない。

後戻りは出来ない：それだけは何となく直感できた。

骸骨は足組みをとき、立ち上がる。

立ち上がるまでは気づきはしなかったが背丈は僕よりも遥かに高かった。

2m近くはあるだろう。

まるで目の前にいる僕をあざ笑うかのように見下ろすのだった。

僕はその威圧感に少し後ずさりを始めてしまった。

そんな僕を「逃げられないぞ」とでも言うかのように長い腕を伸ばし頭をつかんでくる。

「な、何だ：放せ！」

頭をつかまれたまま宙に持ち上げられる。

一体、骨だけの体のどこにこんな力があるのか疑問ではあったが、それよりも不思議だったことがある。

何も痛みはなかったのだ。

何かにぶらさがり、宙に浮いているという感覚だけだったのだ。

しかしそれが尚更、恐怖を倍増させたのも事実だった。

手足をばたつかせ、何とか逃げようとするがビクともしない。

数秒：いや数十秒が経っただろうか？

次の瞬間、頭をつかまれたまま何もない暗闇の空間へと投げ飛ばさ

れた。

「そう騒ぐな：仮にも悪の頂点になると決めたんだろ？ そんな無様な姿を見せ付けては示しなんて到底つかねえな」

悪のヒーローになるとは言ったが悪に染まるつもりなんて到底ない。吹き飛ばされた僕にもすぐにスポットライトのような光は当たっていた。

骸骨も自分が睨まれているという事を確認できているだろう。

「その顔は中々に悪には向いている：が、心配するな。少し記憶を見せてもらったただけだ」

「記憶？ 僕のか？」

自分自身の何もない空っぽの頭を指差して骸骨はそう言った。表情など分からないが馬鹿にされているような気だけはした。

「何の為にだ？」

「強いて言うならば：盛り上げる為？」

何故、疑問系なんだ。

盛り上げる為？

一体何をだ？

よくよく考えてみれば僕は何も分かってはいなかった事に気づいた。一体ここは何処なのか：お前は一体誰なのか：謎はあまりに沢山ある。

ヒーローになるとは言った：しかしそれで僕はどうしろというのだ？ 目的すらハッキリしていない。

それを差し置いて記憶を見た？

自分だけが僕の事を知っていく。

何て不公平、理不尽な話だろうか。

「教えろ。一体ここは何処なんだ？ 僕は何をすればいいんだ？」

その問いを聞いた骸骨は再びイスに腰掛け足を組む。

そして頭に被っていた白と黒の王冠のうち、黒い方の王冠を手にとった。

「ここは”始まり” そして”終わり” でもある」

何の答えにもなっていない。

意味も分らない。

矛盾した言葉を2つ並べただけだ。

「何をすればいいか：それはお前自身が決めればいい」

そう言い終わると同時に手に持っていた黒い王冠を僕へと投げ飛ばしてきた。

それを反射的に受け取る。

「それが”鍵”だ」

「鍵？ 一体何の？」

「”全て”のだ」

全てが謎で回答を聞いても、謎が増えるだけ。

もう考えることすら馬鹿らしくなってきたそう。

そういえばこれは夢だったか：さっき頭をつかまれても痛みがなかったのは夢だからか。

「さあ鍵を使い扉を開け。 お前を決める運命の扉だ」

手の平を上に向け、黒い扉の方へと差し出している。
どうやらこの黒い王冠は黒い扉の鍵というやつらしい。

ならあの白い王冠は白い扉の鍵というやつなのだろうか？

まあ今更そんなことどうでもいいが。

僕の頭の中はすでに、この悪夢から目覚めたいという願望しかなかったからだ。

どうせ夢なら大人しく従って行けばいい……ゆっくりと黒い扉へと歩き始めた。

扉の目の前まで来て足を止める。

当たり前だが王冠の鍵など使ったことがないわけで、どう使えばいいかが分からない。

そういえば扉もよく見ると、ドアノブがあるだけで鍵穴なんてものはないようだ。

何も分らず横目で骸骨を見る。

「引けばいい」

言われたとおりドアノブをまわし扉を引いてみた。

鍵なんて本当にかかっていたのか疑問なくらいにあっさりと開く。

中はこの空間と同じ何も見えず真っ暗。

この扉はただのベニヤ板で中も同じ場所なんじゃないかと思えた。

しかし顔だけを中にのぞき入れ横を見てみたが、骸骨がいなかった
ので別の空間なのだと実感させられた。

「そこから先はお前の自由だ。　したいようにすればいいし、何も
したくなければしなければいい」

「何かすればどうなって何もしなければどうなる？」

「何かすれば変わっていくし、何もしなくても変わっていく。　世

界はそうやって移り変わっていく。英雄に憧れた一人間に何が出るか：はたまた何も出来ないか：」

憧れているのは英雄。

その通りだ。

正義だろうと悪だろうとやる事は同じ。

「困っているなら助ける：それだけだ」

「お互い頑張るとしよう」

お互い？

もう謎はお腹いっぱいだ。

しかし最後にそんな謎をさらに増やそうと思った僕は馬鹿なのだろうか？

「最後に1つだけ聞かせてくれ。お前は一体何なんだ？」

何故か白い扉へと足を進める骸骨に僕は黒い扉の中へと足を進めながら最後に聞いてみた。

扉が閉まる直前、確かに骸骨は言っていた。

「俺か？ 俺は：：今日から”英雄”^{ヒーロー}だ」

そう言ったのだ。

やっぱり謎は増えたただけだったが、この扉が閉まればきっとこんな悪夢から覚め、変わらぬ日常に：。

平和でもあり退屈な現実に戻るんだろうと：：そう思っていたんだ。

2つの扉はゆっくりと閉まり、再び空間は静かな暗闇へと戻った。

英雄4「始まり」(後書き)

静寂へ。

ここまで読んでいただきありがとうございます。
まだまだ意味の分からない謎が多いかと思いますが、ゆっくりと明らかになっていくと思いますので楽しんでいただけたら幸いです。

ではまた次回も読んでいただけたら嬉しいです。

英雄5「王冠」

扉が閉まると暗闇が広がった。

ここはどこだろう？

何もない…何もない…何も…。

何もない暗闇。

何もないなら…僕は何だ？

考えても分からないなら、ただ歩き続ければいい。

それが一番簡単な答えだ。

目を明けると光があった。

寝ぼけながらベッドの横にある時計を見ると時刻は7時を数分回ったところ。

どうやら朝らしい。

寝坊をしたわけではないから、ゆっくりとベッドから起き上がるとクローゼットをあけ学生服へと着替えを始める。

着替え終わると1階へと降りていき、洗面所で顔を洗い歯を磨く。顔を洗ったけれどまだまだ目はハッキリとは開かなく寝ぼけ眼だ。鏡にぼんやりと写る姿を見ると髪も跳ねているようだが、それは後でいいだろうと思いリビングに向かって腰を下ろした。

机に用意された、バターが塗られたパンをかじりながらテレビをつける。

相変わらずの自治ネタや犯罪報道。

世の中は今日も変わらず動いているようだ。

そんなニュースを見ていると、やはり昨日の出来事は夢なんだろうと思えてきた。

もしも現実だったとしても夢の中だけでしか影響がない話なら、やっぱりそれは夢であることには変わりないわけである。

現実に何も影響がないなら僕が生きているこの世界はやっぱり平和でもあり退屈な世界なんだろう。

僕が朝からそんな事を考えているとニュースはいつの間にか天気予報へと変わっていた。

「何が悪のヒーローだ」

テレビに向かってボソツとつぶやいた。

その直後だった。

「お兄ちゃん、それファッション？」

振り向くと僕と3歳、歳が離れた妹が起きてきたところだった。

妹の名前は”未柚^{みゆ}”。

今年、5年生になったポニーテールが特徴的な小学生だ。

身長体重は僕が見た限りではどちらも平均的だろうな。

今は上下ともピンク色の寝巻き姿だが私服はスカートの割合が多いだろう。

色はピンクが好きらしくランドセルもピンク色だ。

だからといって髪はピンク色なんかではなく至って普通の黒髪である。

さて説明はこれくらいでいいとして、ファッションとは何のことだ？
服装は学生服。

アクセサリーなんかもつけてなく髪も別に…ああ成る程。

寝癖を直していないのでそれが奇抜的な髪型にでも見えているんだろう。

「そんなんしてって先生に怒られないの？　ねえお母さん」

妹に呼ばれ台所で作業していた母親が僕の方を見た。

母親の名前は”麻美”^{あさみ}。

眼鏡をかけ茶髪がかった腰まである長い髪。

身長は160後半で体重はどちらかと言えば痩せ型のちょっとしたモデル体型とも言える。

以前はファッション関係の仕事をしていたが僕を身籠ったと同時に仕事は辞めたらしい。

なので今は専業主婦だ。

性格はどちらかといえば活発で、僕からしたらうるさいくらいに明るく元氣な母親である。

「真央、若いうちに髪を染めたり、アクセをつけるのは大いに結構。だけれどそれは止めなさい、センスが悪い」

何を昔の血が騒いだかのように評価をしているんだ。

そもそも寝癖に評価なんてつけるまでもないだろう。

僕だって変な髪のままなんて行きたくもない。

みんなして全くだい迷惑な家族である。

これ以上、何か言われるのも面倒なので少し急ぎ気味で最後の一口のパンを口へと運ぶと再び洗面所へと向かった。

「お兄ちゃんどうしたんだろうね、あんなの買ったのかな？」

「さあ、誰かに貰ったんじゃない？ ほら未柚も早く着替えなさい」

洗面所へと行くと先客が鏡と睨めっこをしていた。

2人して中に入っても窮屈なだけなので外でそれをボンヤリと眺めている。

一生懸命に薄くなってきた髪に何かを塗っているのは僕の父親。名前は”由雄”^{よしかず}。

言っただとおり黒い髪の毛のテッペンが日に日に薄くなってきた

がまだ禿げているまではいつていない。

身長は170中盤で見た目は普通だが、服を脱げばお腹周りはポッコリと出てきている。

服装は今こそスーツだが家では専ら上下ともジャージ。

これでもIT会社のマネージャーをしているんだから驚きだ。

マネージャーというのは分かりやすく言えば部長クラス。

母親とは正反対に大人しめな真面目タイプではあるが、それが災い転じてというか仕事面では優秀な成績を残しているらしい。

年齢は母親より5つ上の44歳：まあ禿げてきてもおかしくはないだろう。

僕は両親の身長をきつと遺伝するだろうと期待はしているが、こんなところまでは遺伝したくはないものである。

そしてこの父親にはもう一つ…。

「おお真央か…ん？　母さん達が言っていたのはそれか…中々格好いいじゃないか。　父さんは好きだぞ」

このように人とは感性が少しズレているのである。

そんな誉められても嬉しくはない言葉を残し父親はリビングへと向かっていった。

さて、再び洗面所の鏡の前に立ち、散々言われている自分の髪を見てみる。

鏡に映った僕の髪：いや頭は想像の遥か上をいった。

さっきは寝ぼけ、ぼやけていたから寝癖かと思ったが違ったんだ。

恐る恐る手を伸ばし自分の頭に”乗っていた”それを手に取る。

紛れも無く手元にあるのは真っ黒な…夢の中で骸骨から受け取った真っ黒な王冠だった。

「な、何で夢の中の物がここに…」

英雄5「王冠」(後書き)

現実 to 侵食。

ここまで読んでいただきありがとうございます。
お気に入りや感想等、ありがとうございます。
励みになり、頑張ろうと思います。

ではまた次回も読んでいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647w/>

善悪ヒーロー

2011年11月17日13時08分発行